

人権コラム4月号

「記憶の継承」

北川知子（大阪教育大学）

今年は阪神淡路大震災から30年という節目の年です。

阪神淡路大震災の発災時、私は出勤準備をしながらラジオを聴いていました。近畿とはいえ被災地からは少し距離があり、激しい揺れに襲われたものの、大きな被害は受けませんでした。その瞬間は何が起きたかわからないまま出勤し、時間の経過とともに、ようやく大変なことになったと気づいたことも思い出します。それでも「そのとき」の経験、「そのとき」の自分の感覚や感情も含めて、よく憶えています。そういう世代の一人として、30年経った今年、「経験を語り継ぐこと」「被災の教訓を風化させないこと」をテーマに在阪メディアがさまざまな特集を組むのを観ていて、考えこんでしまったことを、今回は書きます。

私が小学生だった1970年代、その30年前といえば1940年代になります。つまり戦争末期の都市爆撃の体験、あるいは飢餓に苦しみながら転戦した体験、原子爆弾の被害体験、戦後の食糧難の体験…のある人が社会の中堅層にいたということ。いま、自身が体験した震災の記憶をもつ私が、その記憶のない30歳以下の若い人たちに対して「ああ、この人たちはあれを知らない世代なんだ」とふと考えさせられるように、当時の大人たちは私をみていたのだなど。そして子どもだった私が「生まれる前の遠い過去の出来事」として大人の話聴いていたように、若い人たちにとって阪神淡路大震災は遠い過去ののだろうなど。それは是非の話ではなく、そういう時間的な距離感が生まれるのが、30年という年月の長さだということです。そして、30年なら、まだ生々しい思い出として語れる人たちがいるけれど、70年経てば語れる人は激減し、記録された記憶の継承を工夫する必要が生じてくる、100年経てばそれはもう誰かの記憶ではなく「歴史の一コマ」になってゆく。生々しい体験の思い出が記憶になり、記憶が歴史の一コマになっていく過程のなかでこぼれ落ちていくものについて、私たちはもっと考えなければならないのではないか、と。

子どもの頃、なぜ平和が大切か、戦争をしてはいけないか、理屈ではなく「そんなの、あたりまえでしょう」という面持ちで語る大人ばかりだった気がします。だから、社会全体がそういう雰囲気だった、「なぜ理由が必要なの？」と。でも、80年経った今、社会の空気はどうでしょうか。子どもの頃、周りの大人から手渡されたはずの「戦争なんてダメに決まっている」という思いを、私はきちんと自分のものにできているのかな…。戦後80年の周年でもある今年、そんなことも考えたいと思います。